

受付番号

11-011

留学・研究計画書

氏名 佐藤正樹	留学機関名 Pontificia Universidad Católica del Perú
留学先国名 ペルー共和国	留学期間 西暦 2012年4月～2014年3月
研究テーマ ペルー副王領統治の研究(1615-1639):管轄権をめぐる同意形成を中心に	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>行政制度としてインディアス副王領をみた時、制度自体やその機能については既に多くの事が明らかになっている。ラテンアメリカ全般については、まずはカブデキの先駆的業績をあげようし、ペルーに限ってみても異端審問所、聖俗それぞれのカビルド(参事会)、アウディエンシア(聴訴院)、コレヒミエント、教会組織等に特化した研究を幾つも挙げる事が出来る。インディアスにおける王の分身である副王については、特に史料的高価値の研究がレビリエール、続いてハンケによってなされてきた。そして近年盛んになっている宮廷研究によって、副王が実際の統治運営においては様々な権力集団との折衝を余儀なくされていたことも、明らかになってきた。しかし、制度自体についての研究が進んでも、その実際の機能の仕方については、なお不明瞭な部分も残されている。それは、性質の異なる制度や叙上の権力集団が何がしかの利権をめぐる、あるいは同一の利害関係の中で接触・対立する時、彼らがいかに振る舞ったのか、という問題である。</p> <p>本研究ではとりわけ管轄権という問題に注目したい。例えばある修道会で扱われる諸事項に、その外部の集団が関わることは珍しくなかった。説教行脚の過程で問題を起こした修道士を裁く権限は、誰に委ねられるのか。その教区の司教か、それとも修道会か。副王の命令を以ても解決しなかった問題を、アウディエンシアが解決する、という事態も発生した。限られた財源をめぐる聖俗両集団が争う時、いかにして同意が形成されたのか。またそれはどのように破綻したのか。具体的ないくつかの対立を取り上げ、その解決がどう図られたのかを追うことで、次の点を明らかにしたい。副王領の様々な制度、あるいは権力集団は、相互にどのように機能していたのか。その際、そこに規則・規範と呼ぶものが生まれていたのか。仮に存在したとして、それは、何がしかの雛型(例えばカスティリヤの慣習法)から生成発展したものなのか、それとも、アンデスのローカル社会の慣習から徐々に成型されていったのか。私の研究は、副王領統治の特徴を、管轄権を巡る同意形成の過程に注目しながら、いくつかの事例分析を通して明かそうとするものである。副王領の、制度上の特徴については、前述の通り既に多くのことが分かっている。しかし個々の制度同士の間を扱ったものはあまりない。本研究の学術的意義は、この点にある。また、17世紀ペルー副王領の統治を扱った諸々の先行研究の成果に対し、本研究はそれを補いつつ、それが提示する副王領のイメージを修正するものになるだろう。</p> <p>最後に時代設定について述べる。この時代を積極的に選択するには二つ理由がある。まず、異教根絶巡察問題や「大いなる陰謀」と呼ばれた反ユダヤ人陰謀事件、プロトクリオリスモの興隆など、先行研究の蓄積があり、かつ比較検討することで新しい視点を提供出来る可能性のある歴史事例が存在すること。次に、それと併せて、同時代の評価が対照的であった二人の副王(エスキラーチェ大公とグアダルカサル侯)の治世を再検討することが必要と思われるからである。</p>	

成果報告書

記入日 2014 年 4 月 17 日

氏名 佐藤正樹	留学先国名 ペルー	所属機関 カトリカ大学
研究テーマ：ペルー副王領統治の研究（1615-1639）-管轄権をめぐる同意形成を中心に-		
留学期間：2012年 3月～2014年 3月		
<p>2年間の留学期間の大半はペルーの首都リマに滞在し、同市内に点在する諸文書館での調査に従事した。大雑把に振り返ると、1年目は所属するカトリカ大学の授業と文書調査、2年目は諸々の原稿執筆と文書調査を中心に過ごした。以下にその2年間の成果を整理して報告したい。</p> <p>1. カトリカ大学での授業：</p> <p>留学の目的はリマ市の諸文書館での調査にあったし、授業参加によって研究の時間が失われることも懸念されたが、折角ペルー史研究の拠点の一つと言って良いカトリカ大学に所属するのであるし、ということで1年目の夏学期に Margarita Suárez 氏による植民地期ペルーについてのゼミを、冬学期に Ada Arietta 氏による古文書読解の授業をそれぞれ受講することにした。懸念した通り、少なくないエネルギーと時間を吸い取られたものの、この選択はそれほど不味いものではなかったと言える。Margarita 氏のゼミは、植民地期のペルー史を研究対象にして論文を作成するとはどういう事か、を実践的に教えるものであった。最初に歴史学の論文を作成する手法についてディスカッションを交えながら学んだ後、史資料、具体的には種々の古文書を検討しながら、これらを元にどのような主張が出来うるかを議論し合った。そして最初に確認した、論文作成時に必要な諸要素を踏まえた上で、研究論文のプロジェクトの提出が各生徒に課される。ゼミの終盤は、その個々の生徒の研究計画を皆で検討した。後で知ったのだが、これはカトリカ大学で歴史学を志す学部生が、卒業論文に取り組む前に参加することが義務づけられているゼミであった。</p> <p>周りは自分より一回りほど若い学部生ばかりで、その点やや落ち着かなかったものの、このゼミへの参加は自分の研究を整理する上でも、またいつか教育者として歴史学徒を育てる（かも知れない）点においても有益だった。このゼミを通じて、また私の研究分野における第一人者である Margarita 氏のアドバイスを受けて、私の研究テーマは留学開始時に設定したものから大分変化した。具体的には、研究の時代設定を改め、財政難に苦しんでいたフェリペ4世在位期のスペイン帝国（1621-1665）において、とりわけ植民地ペルーが母国の財政難の影響を本格的に受けることになる副王マンセラ侯の時代（1639-1648）を中心に分析を行うことにした。植民地社会の政治を担っていた、利害の一致しない諸集団がどう折り合いをつけていたのかを分析するという方針そのものに変更はないが、ペルーが強い緊張にさらされた時期を分析対象に選ぶことで、同じくスペイン本国の財政圧力に苦しんでいた帝国内の諸地域との比較という新しい要素が加わり、本研究はより大きな問題関心の広がり、即ちフェリペ4世統治期スペイン帝国の危機というテーマを持つことになった。</p>		

2. 調査活動について

上述のように研究テーマを修正しつつ、並行して諸文書館での調査を行った。1年目は、リマ大司教座聖堂参事会文書館（ACML）を発見したことが自分の研究にとって重要であった。この文書館は2000年まで外部に公開されていなかったからか、研究者の間でも殆ど知られていなかったのである。ここに収蔵されている大司教座聖堂参事会（教会内部における寄り合いのようなもの）の議事録を読み込むことで、教会と世俗国家の緊張関係を論ずるためにどのような事象に着目すべきかを定めることが出来た。なお、この文書館には議事録以外にも、大司教座の会計記録、スペイン王からの命令集、十分の一税の徴収権の競売記録など、重要な史料が数多く残されている。

ACMLに半年ほど通い、副王マンセラ侯の時代におけるリマ大司教座の動きを把握した後は、リマ大司教座文書館（AAL）とペルー国立文書館（AGNP）で調査を行った。AALにはリマ大司教座管轄内の聖職者に関する訴訟記録が大量に所蔵されているだけでなく、多くの文書が既に目録化されているため、ある程度研究内容が固まっている場合には比較的効率よく調査が行える文書館であるといえる。ただし私の場合は、ACMLでの調査を経ることで、AALなどその他の文書館の史料の有用性に初めて気付く、という経緯があった。AGNPも文書史料は多く所蔵しているが、17世紀に関しては植民地政府の行政を司った人々についての記録は殆ど残っていない。AGNPでは、ペルー副王領における最高司法機関であるリマ聴訴院で処理された訴訟事例と、公証人文書を中心に調査した。公証人文書は恐らくAGNPの中でも最も所蔵文書が多いセクション（protocolos notariales と呼ばれる）であり、植民地期を通じて膨大と言って良い記録が残っている。問題は17世紀の場合、殆どの史料は個々の公証人ごとに一冊のファイルとしてまとめられているだけなので、研究に使いそうな史料を手探りすることになり、多大な時間を必要とする点である（目次が付いているファイルも少なくないが、不正確なものもまた少なくない）。時間の無駄遣いを避けるため、これらの公証人文書には、他の史料調査を通じて公証人を含む人名、時期、場所などある程度情報を特定した後であたることにした。

この2年間は、一つの調査が新しい発見や疑問を呼び、それに要請される形で用意した具体的な目的意識とともに新しい調査を行い、それがまた次の調査を要請する、という風に過ぎていった。

たとえば、ACML、AALでの調査に加え、既に関心を集めてあったスペインのインディアス総文書館（AGI）の諸史料を併せて読みながら、リマ大司教座の他に、当該時期のペルー植民地社会の政治を論ずるのに有効な分析対象を定めていった。具体的には、リマ市参事会、地方統治の長であるコレヒドール *corregidor*、監査官 *visitador general* がそれである。そしてこれらを論じるために、リマ市歴史文書館（AHML）、アンカシュ地方文書館（ARA）、ボリビア国立文書館（ANB）、ポトシ歴史文書館（AHP）、クスコ地方文書館（ARC）、チリ国立文書館（ANC）、同国立図書館（BNC）、アルゼンチン国立文書館（AGNA）で更に調査を行った。中にはARAのように、蓋を開けてみたら目当ての史料は殆ど無かった、というケースもあるが、幸い多くの文書館で有用な史料を見つけることが出来た。

この留学を行う以前から、日本でも古文書読解に基づいて研究を行ってきたつもりではあるが、この2年間は文字通り古文書の中に沈み込むようにして暮らした。その結果得られた手応えのようなものは、今まで得ることのなかったものである。先に述べた「具体的な目的意識」がそれにあたるが、調査が次の調査を、研究が次の研究を芽づる式に要請するという事態に直面するのは楽しいことであつた。漠然とした目的だけで古文書を手当たり次第にチェックする作業は中々辛いものである。留学して最初の3ヶ月ほどはそんな状態に苦しんだが、ACMLで半年ほど集中的に調査をしてから流れが変わったように思う。

以上の作業を経て、具体的な研究テーマ（博士論文の論題）を「ペルー4世在位期のペルーにおける政治的危機と平和：副王マンセラ侯爵の統治（1639-1648）についての研究を中心に」と改め、少しずつではあるが執筆を進めている。

3. 研究者との交流

調査を進めること自体が、調査を後押しする力となった2年間だったが、この過程で知り合った研究者との交流も、大きな刺激になった。特に、北米ミネソタ大学で博士論文を執筆中の Alexander Wisnoski 君とは音楽好きな所も共通し、一月ほどの短い間ではあったが同じ長屋で暮らした。文書館での調査の後、夕飯をとりながら様々な話をしたが、お互いの博士論文について話し合えたのは有意義であった。やはり、隣で論文を執筆している人がいると、こちらも書かねばと思うものである。彼との交流は今も続いており、英語原稿をチェックしてもらったり、一緒に学会発表を計画したりしている。

また、以前にスペインで知り合った研究者と、リマやスクレなど、南米各地の文書館で偶然再会することもあり、これもまた楽しく勇気づけられる瞬間であった。

リマの研究者の間では、まずはカトリカ大学の Margarita Suárez 氏の存在が大きい。

彼女からは頻繁ではないが、ごくごく簡潔に、しかし重要なアドバイスを幾つも頂いた。また、留学中に執筆した投稿論文を気に入って頂き、彼女が主催する学会に誘ってもらったのも励みになった。

また Margarita 氏の生徒たち、特に17世紀ペルーの女子修道院の経済活動を研究している Augusto Espinoza 君からは、植民地社会の経済、政治文化について大いに学ばせてもらっている。

リマの国立サン・マルコス大学で学ぶ Gabriel Bustamante 君と知り合ったのは留學生活も後半に入ってからであったが、偶然にも同じペルーのコンチュコス Conchucos 地方に注目していたため、頻繁にやり取りをするようになった。私の場合は1639年からの約10年間を中心として、その中に同地域の分析も含めていたのだが、Gabriel 君は逆に Conchucos に地域を限定し、ただし植民地時代全体の流れを追っている。彼はペルー史における地方研究の促進を目指しており、その研究数の乏しさに不満を持っていた身として、微力ではあるが応援して行きたいと思っている。

留學中は毎年1回、学会で報告することを自分に課したが、2年目にリマで行われた「スペイン帝国と移動」をテーマとする学会は特に有意義であった。同年代の研究者が多く参加していたことも刺激になったが、会議の企画者でもあったスペインの José Javier Ruiz Ibeñez 教授と知りあえたことが大きい。JJ 氏（会議に参加した研究者仲間による愛称）は、スペイン帝国の辺境地域（フランスとの国境域）や移動（軍人など専門職の帝国内移動）を具体的な分析対象として扱いつつも、スペイン帝国の全体像への関心を決して失わない。私もペルー植民地史研究に従事しているが、自分としてはスペイン帝国研究をやっているつもりなので、勉強が後手に回りがちなスペイン帝国のヨーロッパ地域を専門とする JJ 氏と知り合えたことはとても良かった。私の報告を JJ 氏は気に入ってくれ、現在では博士論文の方向について相談に乗っていただいている。留學を通して、優れた査読者を外部に得ることが出来たのは幸いであった。

最後になるが、留學期間中は諸文書館の中でも ACML の館長 Fernando López 氏、AAL の Melecio Tineo 氏、Riva Agüero 研究所文書館の館長 Ada Arietta 氏に大変お世話になった。Fernando 館長には、留學の最初期、ACML に籠っていた半年の間、古文書の読み方から、植民地社会全般について、あれこれ質問して学ばせてもらった。Melecio 氏にも同じく、2年間を通じて古文書の読解を手助けして頂き、また彼を通じてまだ一般に公開されていない文書館を訪れることが出来た。Ada 氏にはカトリカ大学での古文書読解の授業だけでなく、各地の文書館を訪ねる際に、その都度紹介状作成の労をとっていただいた。皆非常に親切であり、彼らとのやり取りは、時にストレスのたまるリマでの暮らしを乗り切る一助になっていたと思う。

4. 留學生活全般に対する感想

長期の留學においては珍しいことではないと思うが、出発前はそれなりに不安であった。私の場合、果たしてリマで2年間も調査することがあるのだろうかという点と（私の研究テーマの場合、どちらかと言えばスペインのAGIに必要な史料が多く存在するという印象を持っていたのである）、同じく2年間も朝から晩まで禁欲的に文書館に籠って過ごすことが出来るだろうか、という点である。幸い、これらの心配はどちらも杞憂に終わった。上述したように、最初の史料調査が芋づる式に次の調査を要請する中、体調を崩したり執筆作業に追われている時以外は特別飽きもせず2年間調査を続けることが出来たのである。この経験から得たものは、とりあえず自分は歴史学の研究に向いており、この先もこの作業に従事していけるのではないかと、という手応えである。

また、奨学金を得る、すなわち研究だけに専念できる状態を2年間もの長期に渡って享受出来たのは初めての経験だったが、結果自分の研究をかなり進めることが出来た。と書くと当然のような気もするのだが、これは研究資金を確保した上で研究することの重要性をようやく痛感したということでもある。今までは奨学金の類いに対しやや遠慮を感じていたのだが、それはもう消えた。その意味で、この留學生活を通じて研究者としての自覚がようやく芽生えたように感じている。もちろん様々な研究者との交流も、この点に寄与する所は大きかった。

以上述べて来たように、この留學生活からは、いただいた支援の大きさにふさわしい収穫をえることが出来た。このような機会を与えられたことに感謝しつつ、引き続き地道に研究を続けて行きたい。



ACMLの館長、Fernando López氏と。留學中最もお世話になった方の一人。



留学中最後の調査の後に、AALの文書館の皆さんと。左から私、チリの Constanza Alruiz さん、地元ペルーの Jimmy Martínez 君、文書館員の Melecio Tineo 氏、そして館長の Laura Gutiérrez 氏。



カトリカ大学の古文書学教授にして Riva-Agüero 研究所文書館の館長、Ada Arietta 氏と。



ペルーは必ずしも住みやすい国だとは思わないが、食事が美味しいのは暮しの大きな支えであった。これはその中の一つ、ペルーの定番料理 lomo saltado。